

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
教育研究評議会（第45回）議事要旨

1. 日 時 平成27年11月26日（木）10：45～13：25
2. 場 所 自然科学研究機構事務局会議室
3. 出席者 佐藤議長、大隅評議員、岡田（泰）評議員、小間評議員、佐藤（哲）評議員、常田評議員、平野評議員、廣田評議員、村上評議員、飯澤評議員、観山評議員、岡田（清）評議員、林評議員、竹入評議員、山本評議員、井本評議員、大峯評議員、渡部評議員、金子評議員、上野評議員、小杉評議員（陪席者）
武田監事、竹俣監事
（事務担当者）
植垣総務課長、野田企画連携課長、富澤財務課長、大河施設企画室長、国立天文台 佐々木事務部長、核融合科学研究所 山本管理部長及び岡崎 統合事務センター 棚木事務センター長 他
（研究成果発表者）
麻生 洋一 准教授（国立天文台）
4. 配付資料
 - 1 教育研究評議会（第44回）議事要旨（案）
 - 2 大学共同利用機関法人自然科学研究機構長候補者の決定について
 - 3-1 核融合科学研究所で発生した火災事故について
 - 3-2 大型ヘリカル実験棟ヘリウム液化冷凍機室火災事故対策について（最終報告）
 - 3-3 大学共同利用機関法人自然科学研究機構核融合科学研究所火災事故検証委員会設置要項
 - 3-4 自然科学研究機構核融合科学研究所火災事故検証委員会委員
 - 4 年俸制職員の採用について（報告）
 - 5-1 年俸制職員就業規則適用職員に同規則で定める最高額の年俸額を超えて年俸を決定することについて
 - 5-2 平成26年度国立天文台外国人研究者受入促進事業に基づく外国人研究者申請書（Mathews Grant J.）
 - 5-3 平成26年度国立天文台外国人研究者受入促進事業に基づく外国人研究者申請書（Balantekin Akif Baha）
 - 5-4 平成26年度国立天文台外国人研究者受入促進事業に基づく外国人研究者申請書（Renzini Alvio）
 - 6-1 平成26年度に係る業務の実績に関する評価の結果について（通知）
 - 6-2 大学共同利用機関法人自然科学研究機構の平成26年度に係る業務の実績に関する評価結果
 - 6-3 平成26年度に係る業務の実績に関する評価結果等について
 - 6-4 国立大学法人等の平成26年度評価結果について
 - 6-5 機能強化に向けた取組み状況一覧

- 6-6 新たに認定された戦略的・意欲的な計画 (30 法人)
- 6-7 国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況【平成 26 年度】
- 6-8 平成 26 年度評価に係る評価方法、審議経過等について
- 7-1 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について (国立天文台)
- 7-2 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について (核融合科学研究所)
- 7-3 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について (基礎生物学研究所)
- 7-4 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について (生理学研究所)
- 7-5 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について (分子科学研究所)
- 8-1 平成 28 年度 概算要求の状況
- 8-2 大学共同利用機関法人 平成 28 年度概算要求の概要について
- 9 第 19 回自然科学研究機構シンポジウムについて
- 10 アストロバイオロジーセンター開所式及び第 8 回自然科学研究機構佐藤勝彦機構長プレス懇談会について
- 11 NINS / IURIC Colloquium 2015 について

5. 議事等

議事に先立ち、定足数の確認及び配付資料の確認があった。

1) 前回議事要旨 (案) について

前回教育研究評議会 (第 4 4 回) 議事要旨 (案) (資料 1) が了承された。

2) 自然科学研究機構長候補者の決定について

佐藤機構長から、資料 2 に基づき、自然科学研究機構長候補者の決定について報告があった。

また、小間評議員 (機構長選考会議議長) から、機構長候補者の選考理由について説明があった。

3) 核融合科学研究所の火災事故について

竹入評議員から、資料 3-1 及び資料 3-2 に基づき、核融合科学研究所の火災事故について報告があった。

また、飯澤評議員から、資料 3-3 及び資料 3-4 に基づき、火災事故検証委員会の設置及び委員について説明があった。

(主な意見等は以下のとおり)

- 人命が失われたということだが、①場所、②逃げ遅れた理由、③死亡原因の 3 点についてお聞きしたい。
- ①核融合科学研究所大型ヘリカル実験棟ヘリウム液化冷凍機室において、ヘリウム液化冷凍機のコールドボックスの外套を外し、中ほどの高さに設置したステンレス製の足場からコールドボックスの内側へ向けて足場となる板を渡し、内部のパイプ溶接作業を行っていた。②作業においては、溶接作業者と監視者の 2 名で実施しており、監視者は逃げることができ、また、現場の監督者は直ちに避難命令を出したということであるが、溶接作業者は逃げ遅れた。その原因について、私どもで特定することはできない。しかし、状況とし

ては通常起こり得ない TIG 溶接による火花以上の大きさの溶融したステンレスの塊が落下した点に鑑みて、溶接作業者の健康状態に何らかの問題が発生したのではないかという点においての疑念は否めず、警察の捜査においても、労務管理がポイントになっているのではないかと推測している。③死亡原因については、警察の発表では焼死となっており、詳細を問い合わせるも、それ以上の情報は得られなかった。溶接は、アルゴンガスを用いた TIG 溶接であり、酸欠等の懸念もあるが、位置的に高く、換気も行っていたため、他の原因であると考えている。直接的な物理的原因は、ステンレスの溶融玉が落下し、防災シートでは防ぐことができず、可燃物である断熱材に接触し、着火したものと推定している。このため、ハード面としては可燃物の撤去、ソフト面としては人命最優先で労務管理を行うことを事故防止対策の柱とした。

4) 年俸制職員の採用について

竹入評議員から、資料 4 に基づき、年俸制職員の採用について報告があった。

5) 年俸制職員就業規則適用職員に同規則で定める最高額の年俸額を超えて年俸を決定することについて

林評議員から、資料 5 - 1 から資料 5 - 4 に基づき、年俸制職員就業規則適用職員に同規則で定める最高額の年俸額を超えて年俸を決定することについて報告があった。

6) 平成 26 事業年度に係る業務の実績に関する評価結果について

観山評議員から、資料 6 - 1 から資料 6 - 8 に基づき、平成 26 事業年度に係る業務の実績に関する評価結果について報告があった。

(主な意見等は以下のとおり)

- 自然科学研究機構がリーダーシップを発揮し、各大学の研究力強化に貢献する大学研究力強化ネットワークを組織している点は、非常に高く評価している。この貢献について、次期評価ではさらに理解が得られるように努めていただきたい。
- このネットワークは 2 年前に発足し、25 の大学等により構成されている。最近では、今問題となっている大学ランキングに関してのタスクフォースを立ち上げ、シンポジウム等も開催している。この場では、このネットワークに参加していない大学にも多数参加していただいております、更に強力で推進する予定である。

7) 平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について

林評議員、竹入評議員、山本評議員、井本評議員及び大峯評議員から、資料 7 - 1 から資料 7 - 5 に基づき、当該機関の平成 26 年度自己点検・自己評価、外部評価について報告があった。

(主な意見等は以下のとおり)

- 自然科学研究機構には新分野創成センターや統合バイオサイエンスセンター等が設置されていると思うが、これらに関する自己点検・自己評価、外部評価は、現在のように各大学共同利用機関の中で言及されるだけなのか。
- アストロバイオロジーセンターについては、本年4月から立ち上げたところであり、外部評価については、来年度から行うことを考えている。本年度はNASA アストロバイオロジー研究所と連携について調印し、ヨーロッパのネットワークとも関係を持っており、世界的動向における日本の位置について、是非評価をしていただきたいと考えている。
- 統合バイオサイエンスセンターは10年で評価し、見直すこととなっているが、独自の評価はまだ行われていないため、評価のシステムとして考えなければならない問題であると認識している。
- 現在は、統合バイオサイエンスセンターに所属している教育研究職員は、岡崎の3機関のいずれかにも併任しており、3機関の中での活動として評価している。統合バイオサイエンスセンターとしての評価は行われていないが、同センターの運営会議委員には外部委員も存在しているという点で、外部の目に晒されている。今後、センターとして評価を行う点については検討させていただきたい。
- 新分野創成センターについて、従来の3研究分野のうちの1つはアストロバイオロジーセンターとして発足した。残りの2つの研究分野については、第3期に入って融合発展させてゆく予定となっており、そのために、現在、これまでの活動を評価し纏めつつ、発展してゆくための議論を始めている。よって、内部的に評価は行われており、来年度にはご報告できるものと考えている。
- 岡崎の3機関で努力し、統合バイオサイエンスセンターの在り方や、3機関で新たな試みを行うなど、模索中である。新分野創成センターも若干関係するが、両者を擦り合わせながら、新しい試みをしてゆかねばならない。
- 各機関での評価は適切に行われているのは分かるが、この評議会の前に、各機関の評価を、機構として真剣に議論するような場はあるのか。
- この評議会の前に、役員会において議論を行っている。ただし、基本的に大学共同利用機関は各分野のコミュニティが運営している面があり、具体的な研究の成果についてもコミュニティに大きく依存している。本部が大学共同利用機関に干渉することについては、慎重さが必要であると考えている。
- 毎年ではないが、自然科学研究機構においては、機構全体の評価を実施している。ここで前回指摘されたのは、機構はどのような役割をしているのかという点である。この点について、ひとつは自然科学研究機構としての広報の役割、また、機構長の裁量という点では、例えば新しい分野の創成や、NINS Colloquium により新しい方向性を創ることなどが挙げられる。しかし、個別の大学共同利用機関の在り方については、コミュニティとの連携が非常に重要であり、この点については機構憲章に5つの大学共同利用機関の連合体であるとされている点に鑑みて、独自性を尊重するという立場である。
- 機構として干渉しすぎてもいけないが、これからの方向性や大きな長期的なものを見てゆくような仕組みがあると各機関においても新しい発展があるのではないか。
- 具体的には第3期になるが、文部科学省から大学共同利用機関の役割、貢献

について、数値化・可視化することが求められている。この点について、分析の結果、次第に各機関の在り方というものが随分違うということが分かってきた。よって、各研究所の特性を活かす指標を作ってゆく必要があり、これが分かればそれぞれの研究所の個性を活かした共同利用・共同研究の方針が明確となるため、指標を見ながら、より有効な手段を検討することはできると思うが、それぞれの研究所の運営そのものについて干渉することは難しいと考えている。指標について、自然科学研究機構は、特にビッグサイエンスから個人的なサイエンスまで包含しており、各研究所の特徴を活かしながら指標を作ってゆかなければならない。

- 機構本部は大きな枠は決めるが、細かな点についてはコミュニティの意見に基づき、当該分野で最大の成果を挙げるべくデザインされるように各機関で努力しているのが現状である。
- 大学の場合は、個々の教員の自主的な工夫などが一番大切な部分である。一方で大学全体として、それぞれの構成員のベクトルが総和として優れているのみならず、ある方向でベクトルを広げるような緩い運営も求められている時代であると思う。機構の場合は、各分野の研究所の活動と同時に、統合したときのメリットをどのように出してゆくかということと、他の研究機関とは異なり、大学共同利用機関であるという点が、国の期待と設立主旨を表し、また、指摘されることであると思う。大学共同利用機関としての指標といったものは、画一に表せず、共同利用の数だけではなく、各機関から大学へ輩出した優秀な教員の数など、複数の指標で訴える方法があるものとする。
- 評価については、4機構合同で議論し、共通のベクトルを見つけながら努力している状況である。また、更に機構の枠を越えた対応も求められる時代ではないかと考えている。
- 評価について、各機関でも異なり、機構間でも異なると思うが、共通していることは、人材を育成し、大学に供給している点であるので、この点を、是非、取組みの方向性として重要視していただきたい。
- 大学共同利用機関としての機能をどの程度発揮できているかという点が重要であると思う。評価を受ける際に外国人による評価も重要であるが、サービスを受ける側である大学の共同利用者の評価も重要であるとする。文部科学省の評価の観点も重要ではあるが、各大学からポジティブに評価してもらい、サポートしてもらおうということが、研究所の長期的な存続という点で重要なものとする。
- 大学全体から研究所を見たときに、そこでの共同利用が見えてこないことが深刻な問題であり、11月2日の国立大学協会総会で大学共同利用機関法人の活動を報告した。その資料においては、従来、研究所視点での利用データであったところ、逆に大学視点とした結果、全国立大学が大学共同利用機関を利用していることが分かった。このように可視化については4機構全体で努力している状況である。

8) 平成28年度概算要求について

飯澤評議員から、資料8-1及び資料8-2に基づき、平成28年度概算要求

について報告があった。

9) 自然科学研究機構シンポジウム（第19回）について

林評議員から、資料9に基づき、自然科学研究機構シンポジウム（第19回）について報告があった。

10) アストロバイオロジーセンター開所式及び第8回機構長プレス懇談会について

佐藤議長から、資料10に基づき、アストロバイオロジーセンター開所式及び第8回機構長プレス懇談会について報告があった。

11) NINS/IURIC Colloquium 2015 について

岡田（清）評議員から、資料11に基づき、12月1日（火）から12月3日（木）に開催予定のNINS/IURIC Colloquium 2015 について報告があった。

12) 機構の最近の研究について

本機構の最近の研究成果について、国立天文台の麻生 洋一 准教授から「重力波検出器 KAGRA で拓く新しい天文学」と題して発表が行われ、意見交換があった。

以上